

派遣者番号	R06J01	氏名	安藤 浩太
研究主題 —副主題—	幼小接続期における学習プロセスの構造的解明 —遊びと授業の構造と媒介に着目して—		
派遣先大学	早稲田大学 大学院	指導担当者	佐藤 寛之
所属	昭島市立 光華小学校	所属長	眞砂野 裕

キーワード： 幼小接続、遊び、学び、学習プロセス

要旨： 本研究は、幼小接続における「学びの接続」を、活動内容ではなく学習構造（学習プロセス）の変化として捉え直したものである。TEA 分析の結果、幼児教育の総合的な「遊び」を、自己の枠組みで対象を解釈する探索及び同化中心の構造と規定し、そこから他者の視点やルールを取り入れ枠組みを更新する調節中心の「授業」へと移行するプロセスを解明した。

遊びから授業への架け橋となるのは、教師やクラスメイト、教材といった「媒介」の存在である。学習者が自ら生成した意味的目標に対し、適切な媒介が作用することで知的な調節が促され、より高度な同化（熟達）へと至る。この構造的転換を意識した指導こそが、資質・能力を育む円滑な接続を実現することを明らかにした。

現行の小学校学習指導要領が2017年に改訂され、「コンテンツ・ベース」から「コンピテンシー・ベース」へと学力観が大きく転換した。この学力観の変容は小学校のみならず、幼稚園教育要領や保育所保育指針などを含む幼児教育から高等学校教育に至るまで一貫して適用されており、資質・能力という共通の枠組みで教育課程を整理することが求められている。こうした背景から、学校段階間の接続、特に幼児教育と小学校教育の円滑な接続は、現代の教育政策及び実践において重要な課題となっている。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の共有やスタートカリキュラムの編成と実施など制度上の枠組みを整えたものの、実際の現場では幼児教育における遊びを通じた学びが、小学校の教科等での学びにどのように質的に移行していくのかという具体的なプロセスについての理論的・実践的研究がまだまだ不十分である。その結果、指導法の曖昧さや学びの転換プロセスの不明瞭さが現場の戸惑いを生み、理想ばかりが先行し、現実とのギャップが課題として浮き彫りになっている。

歴史的に見れば、幼小接続へのアプローチは学校体系の改革と小1プロブレムの予防という2つの流れで進んできた。1990年代後半に顕在化した小1プロブレムへの対応として、小学校生活への適応を促す指導が普及したが、当初は適応指導に偏り、学びの連続性を軽視しているとの批判もあった。その後、適応だけでなく安心・成長・自立をねらいとする段階を経て、現在は幼児期の経験を各教科の学びに生かす「学びの接続」を重視するステージへと深化している。2023年には「幼保小の架け橋プログラム」が提唱され、5歳児から小学1年生までの2年間を架け橋期と位置づけ、幼保小の教員が協働してカリキュラムを編成・実施することが求められるようになった。学びの接続も含む円滑な幼小接続に向けて、齊藤や吉永は双方の実態に基づくカリキュラムの必要性を説いている。そして、数々の知見及び答申などに見られるように、幼小における特定の内容や対象の関係性といった学習内容についての知見が積み重なっている。一方で、岸野が指摘するように、学習方法も含む学習プロセスに着目した実践や研究は乏しく、不透明な現状がある。また依然として幼児教育の活動としての遊びと、小学校教育の教科等の授業の間には隔たりがあり、両者を同じ土俵で検討できる理論的枠組みの構築が求められている。

本研究では、これらの課題を解決するために、幼児教育の中心である遊びと小学校教育の中心である授業の構造を明らかにすることを目的としている。まず「遊びとは何か」という存在論的な問いに対し、既存の網羅的条件主義や主観中心主義の限界を指摘した上で、関係論としての存在様態・状況主義のアプローチを採用する。これは、遊びを主体と客体が分かちがたく結ばれた遊戯関係と捉えるガダマーや西村清和の知見に基づいている。ここにピアジェの同化・調節による知能活動の枠組みと、ヴィゴツキーの媒介論を統合し、遊びとは「空間的・時間的な余白の中で起こる、遊び手と対象との相互往還的なやりとりが成立している存在状況、あるいは関係性である」と規定した(図2-3)。

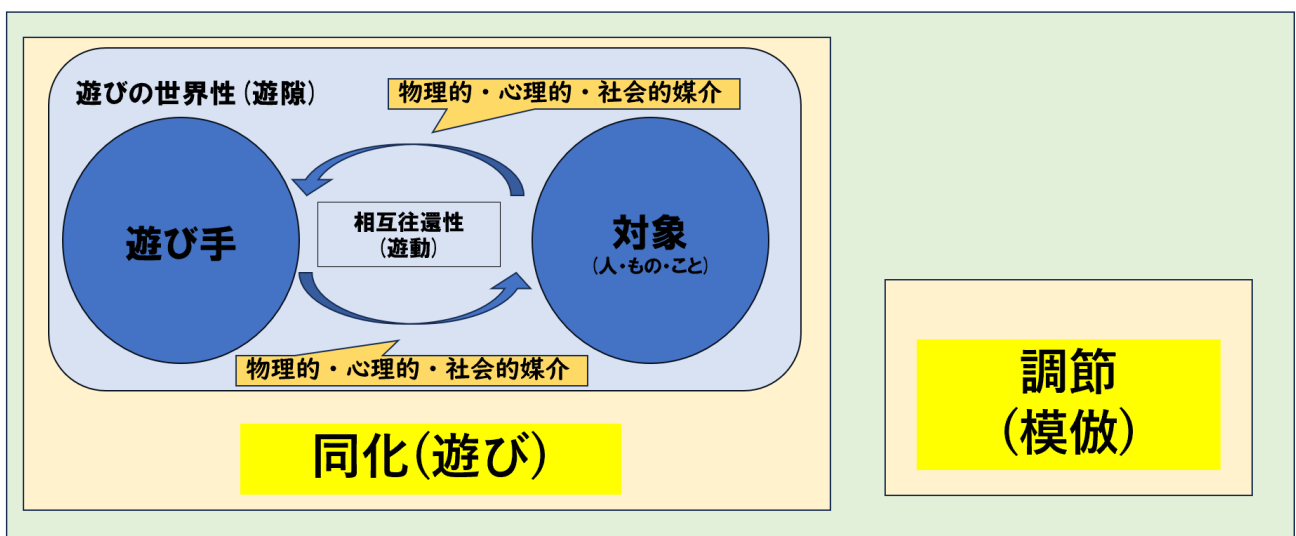


図2-3 本論文における遊びの概念規定のイメージ

遊びは既存の枠組みを対象に当てはめる同化が優位な状態であり、対して自身の枠組みを組み換える調節は模

倣の側面を強く持つが、これらは表裏一体として状況に応じて流動的に揺れ動くものである。また、遊びと学びとの関係性については、学びと熟達を同義と捉え、遊びが学びに包摂された関係であると措定した。そして、Dreyfus らの熟達化モデルをもとに、各段階の同化の調節の関係を整理した（表1）。

■表1 熟達化のプロセスモデルにおける遊び（同化）と模倣（調節）の関係性

段階	段階ごとの遊び（同化）と模倣（調節）の関係性
初心者 (Novice)	状況に依存しない客観的なルールを学び、それを正しくこなそうとする段階。この段階では、学習者は新たな対象に合わせて自己の枠組みを組み換える必要があるため、「調節（模倣）」が圧倒的に優位となる。ここでは、まだ同化が優位になることは少ないと考えられる。
初級者 (Advanced Beginner)  習熟者 (Competent)	経験を積み、状況的な要素を考慮し始める段階。ここでは、依然としてルールの忠実な遂行にこだわりながらも（調節）、徐々に自らの意図に基づいた判断（同化）が出来始める。失敗と成功を繰り返しながら、調節と同化の優位性が絶えず立ち代わる、葛藤に満ちた段階。
熟練者 (Proficiency)  専門家 ( Expertise)	対象や状況をルールに照らし合わせ分析的に捉えるのではなく、直感的に全体像を把握し、流れるように適切な行動を遂行できる段階（高次元な同化）。ルールを参照しなくとも、そのルールを状況に合わせて活用できるため、調節に比べ、同化が優位な状態であると考えられる。

この理論的枠組みに基づき、〈調査1〉では年長児の遊びが継続・発展していくプロセスを可視化するため、複線径路・等至性モデル TEM を用いた質的分析を行った。3つの幼稚園での参与観察から得られた109件の事例のうち、遊びが顕著に発展していった事例の中でも、様々な展開が見られた5つのデータに着目し、それぞれの詳細な TEM の手順に則り、描いた後、共通箇所を統合して、1つの TEM の形にまとめた。なお、この5つのデータに関しては、公立A幼稚園から2例、私立B幼稚園から2例、国立C幼稚園から1例取り上げることで、ある園の特殊性に偏ることのないように配慮した。さらに、統合して1つにまとめた TEM を基盤とし、他の事例のデータを紹介し、新規の概念が出現しなくなった12例目でもって TEM 的飽和とした。筋トレ場づくりや虫探しなどの代表的な5事例を精査した結果、遊びが発展するプロセスには共通する5つの段階が存在することが明らかになった（表2）。

■表2 遊びが継続・発展していくプロセスの5つの段階

段 階	特 徴, あるいは図や本文での記号
I. 「探索的行動（ブラブラ）期」	教室や園庭などの環境の中から魅力的なものはないかと、何となくブラブラと見て回り、物や場に参入する時期（OPP1, OPP2）
II. 「世界性の醸成期」	遊び手が遊びの場へと参入した後、その遊びの世界性の中で、様々な対象との関係を結び始める（同化的展開）時期（BFP1）
III. 「世界性の深化期①」	対象と違う関係を取り結びながら発展していく際に、対象への目標が生成され、その目標を叶えるための行動が展開される時期。この行動の展開は「同化的展開」と「調節的展開」に大別できる。（OPP3, OPP4）
IV. 「世界性の中での探索的行動（ブラブラ）期」	目標が達成され、一定の期間遊んだ後に、その活動を取りやめ、OPP1のように遊び空間をブラブラと回遊し始め時期。OPP1の探索的行動と異なり、OPP1から OPP4 までに構築された遊びの世界性の中で探索的行動を行っている。（OPP5）
V. 「世界性の深化期②」	新たに対象への目標が生成され、その目標を叶えるための行動が展開される時期。以降は、IVとVの展開が繰り返される。（BFP2, OPP6, EFP）

まず「探索的行動（ブラブラ）期」において、園児は魅力的な場を求めて環境を回遊し、遊びの場へと参入する。次に「世界性の醸成期」では、対象と関わりながら遊びの世界の輪郭を形作っていく。この段階は自身の枠組みを当てはめる「同化的展開」が中心であり、自分の思い通りになるという達成感による機能的快樂を伴う。しかし、単なる反復は飽きを生むため、ここで重要になるのが「目標の生成」である。遊びが継続・発展するか消失するかの分岐点は、この目標が生成されるか否かにかかっている。目標が生成されると「世界性の深化期」へと移行し、目標を叶えるための行動が展開される（図2）。

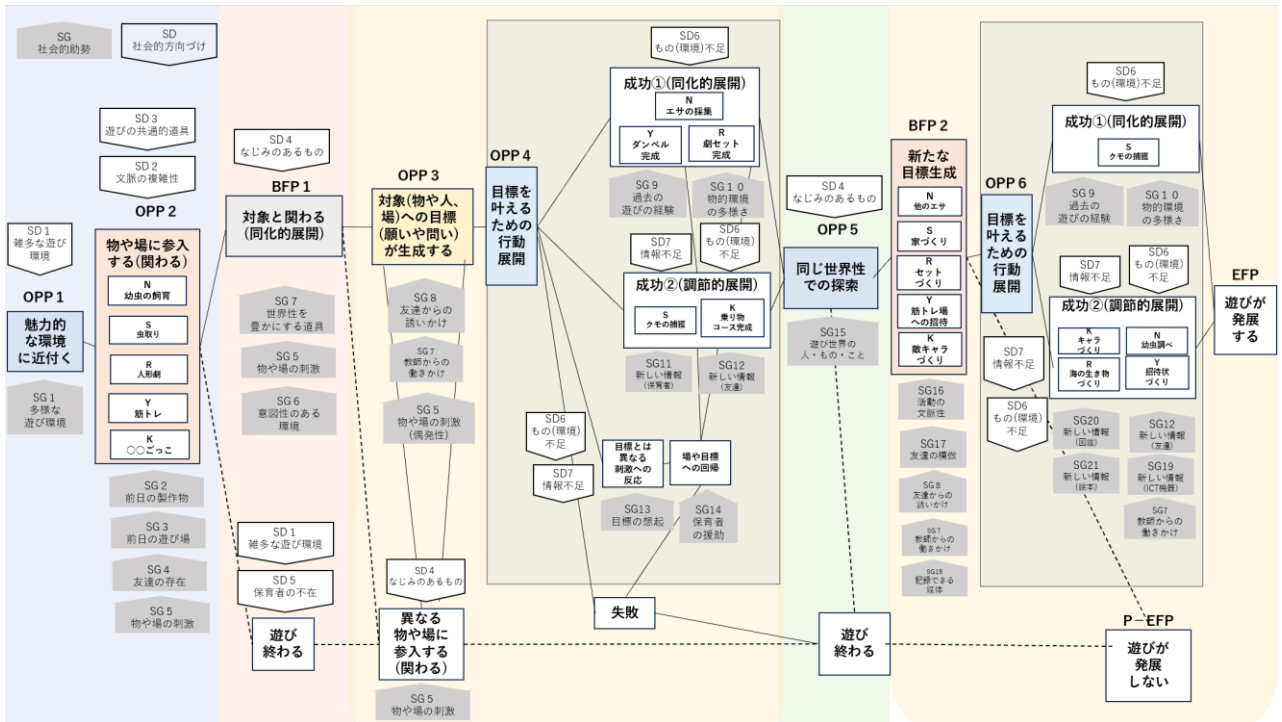


図2 年長児の活動が継続・発展していくプロセスのTEM（統合TEM）

この際、従来の枠組みで対応可能な「同化的展開」だけでなく、新たな情報を入手して自己の枠組みを更新する「調節的展開」が組み合わさる。調節的展開においては、保育者や友達といった他者、あるいは図鑑、絵本、ICT機器などの心理的道具が重要な媒介物として機能する。事例では、クモを飼うために「家が必要である」という情報を保育者から得たり、作りたいキャラクターをICT機器で調べたりすることで、園児は自身の枠組みを組み換え、対象と新たな関係を結び直す姿が観察された。目標達成後、園児は再び構築された世界性の中で「探索的行動」を行い、次なる目標を創出することで遊びを深化させていく。この循環は、自身の枠組みを状況に当てはめる「活用」と、枠組みを組み換える「習得」が一体となった幼児期の熟達化プロセスであるといえる（表3）。

■表3 遊び（同化）と模倣（調節）、探索の関係性を組み込んだ幼児期の熟達化のプロセスモデル

段階	段階ごとの遊び（同化）と模倣（調節）の関係性
探索者 (Explorer)	ある世界との接触を求めて、身体的に回遊している（探索的行動）段階。環境（人・もの・こと）からの「呼びかけ」を探索したり、物や場に参入したりする。
発見者 (Discoverer)	ある世界へと参入し関わり始めること（同化）で、対象世界への思いや願いが醸成されたり疑問が生まれたりすると目標が生成し、対象世界への目標が生成される段階。そういった世界性の中で、対象と様々な関係を取り結ぶ（同化）ことで、目標が生成されていく。
初心者 (Novice)	状況に依存しない客観的なルールを学び、それを正しくこなそうとする段階。この段階では、学習者は新たな対象に合わせて自己の枠組みを組み換える必要があるため、「調節（模

	做) 」が圧倒的に優位となる。ここでは、まだ同化が優位になることは少ないと考えられる。
初級者 (Advanced Beginner)	経験を積み、状況的な要素を考慮し始める段階。ここでは、依然としてルールの実忠な遂行にこだわりながらも(調節)、徐々に自らの意図に基づいた判断(同化)が出来始める。
習熟者 (Competent)	失敗と成功を繰り返しながら、調節と同化の優位性が絶えず立ち代わる、葛藤に満ちた段階。
熟練者 (Proficiency)	対象や状況をルールに照らし合わせ分析的に捉えるのではなく、直感的に全体像を把握し、流れるように適切な行動を遂行できる段階(高次元な同化)。ルールを参照しなくとも、そのルールを状況に合わせて活用できるため、調節に比べ、同化が優位な状態であると考えられる。
専門家 ( Expertise)	

他にも新たな発見として遊びが単なる反復で終わるか、質的に発展するかを分ける分岐点が、「目標の生成」にあるという点が挙げられる。ここでの目標とは、単なる作業の完了ではなく、対象との関係をより豊かにするために自ら創出した「意味的目標」を指す。たとえば、ただ部屋の屋根にぶら下がって遊ぶ状態から「筋トレ場を作る」という目標が生まれることで、活動に新規性や適度な困難さが加わり、遊びが「学び」へと深化していく。この目標生成には、保育者の適切な問いかけや、意図的に構成された環境刺激が不可欠な役割を果たしていた。また、遊びを支える「媒介(道具)」と「世界性の構築」についても考察をすすめた。遊びの世界を具体化する際、自身の既存の枠組みを当てはめる「同化的展開」では、廃材などの汎用的な物的媒介が用いられる。一方で、未知の課題に直面し、自身の枠組みを組み換える「調節的展開(模倣)」が必要になると、図鑑やICT機器、あるいは他者の助言といった、より高度な心理的・社会的媒介が介在し始める。このように、媒介が質的に高度化していく過程は、子供がより妥当な情報を求め、知的に成長しようとする「熟達」の表れであると結論づけた。

続く第4章の〈研究2〉では、この幼児期の遊びの構造を小学校の授業に援用し、円滑な接続を支える授業モデルの構築を試みている。現状、小学校の授業は「習得・活用・探究」というプロセスで示されているが、教科ごとに学習プロセスが異なり、特に知識の習得を優先する論理が幼児期の遊びの構造との大きな段差を生んでいる。本研究では、遊びの構造と「習得・活用・探究」の関連性を整理し、「探索(教材との出会い) ➤ 同化(活用) ➤ 目標生成 ➤ 調節 ➤ 高次元な同化」という循環的な授業構造モデルを提案した。このモデルを検証するため、小学校1年生の国語科「はなのみち」において、筆者自身による授業実践とオープンコーディングによる質的分析を行った。

実践の結果、授業においても遊びと同様の「目標の生成」を起点とした学びの展開が確認された。当初、児童らは幼児期の劇遊びの経験(既有知識・経験)を想起し、「物語世界に入り込むこと」をゴール(大目標)として同化的に活動を開始した。しかし、「もっとなりきりたい」という自発的な意味的目標が生成されることで、児童らは「台詞(会話文)を特定する」や「動きや表情を工夫する」といった調節的課題に直面する。ここで、鍵括弧という記号やテキストの細部といった高度な媒介が、自身の目標を達成するために不可欠な道具として機能し始めた。児童は教師から一方的に教えられるのではなく、自らの劇遊びを豊かにするために能動的に教科書を精読し、自身の表現を修正・洗練させていったのである。これは、調節によって獲得された技能が再び「高次元な同化」へと統合された姿であり、単元の終末には叙述に基づきながら自由自在に物語世界を遊動する熟達の姿が見られた(図3)。

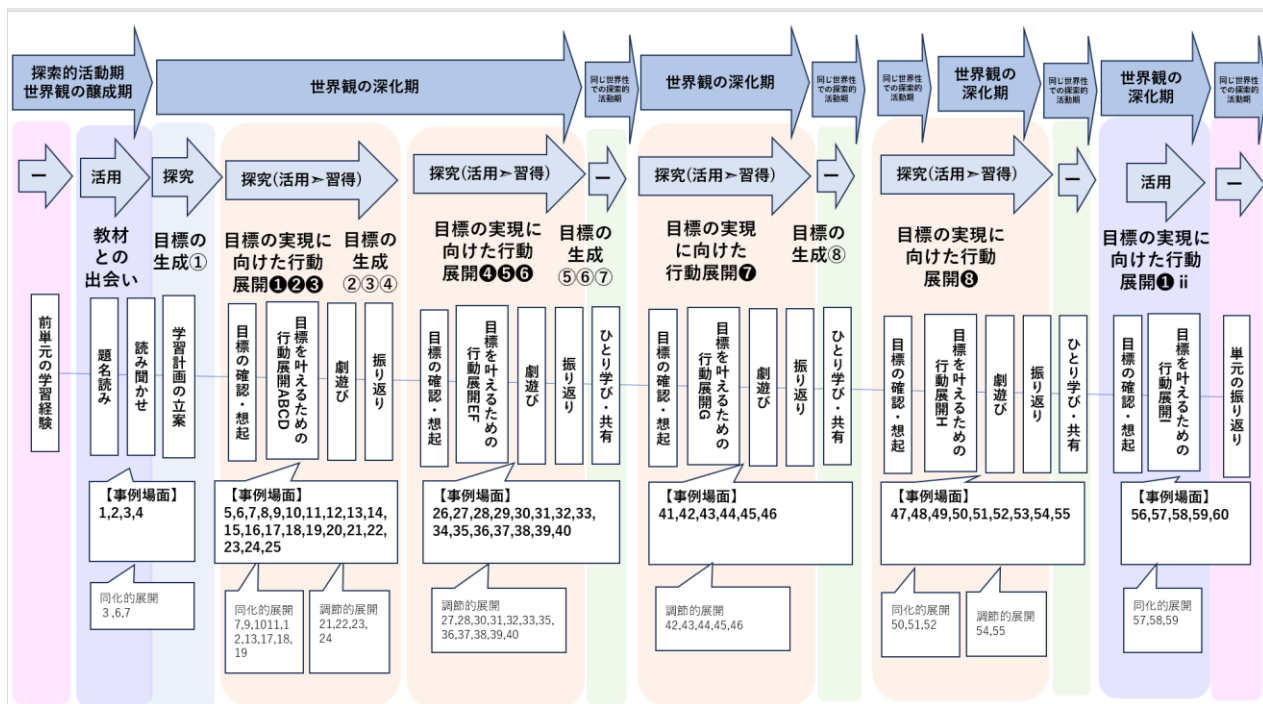


図3 本単元における同化的展開と調節的展開の分布を含む学習プロセス統合図

この授業モデルの有効性を3つの観点から総合的に考察した。第一に、児童の既有知識・経験の有効活用である。従来の「0からのスタート」という学習者観を脱却し、単元冒頭に「活用（同化的展開）」を位置づけることで、幼児期の学びの芽が教科学習を誘発することが実証された。第二に、国語科の目標達成と学びの深化である。劇遊びという児童の文脈に沿った活動は、テキストの精査・解釈という調節的負荷を解決すべき魅力的な課題へと転換させ、結果として従来の単元指導案よりも多面的かつ深層的な資質・能力の育成をもたらした。第三に、媒介の質的高度化による知的な熟達である。身体的・感覚的な媒介から、言語や記号といった論理的媒介へと、児童が自ら情報の質を高めていくプロセスこそが、幼小接続期における学びの連続性を担保する本質であることが明らかになった。

本論文の結論として、幼児教育の「遊びの構造」を小学校の「授業構造」に統合することは、学びの質を低めるところか、むしろ教科学習への主体的な参入を促し、知的な熟達を加速させるものであると結論づけられる。今後の展望としては、この授業構造モデルを国語科以外の他教科や、異なる領域・文種においても検証し、その汎用性を明らかにすることが求められる。このような探索・同化・調節の循環プロセスを授業設計の基礎に据えることで、幼児期に培われた豊かな経験(既有知識・経験)が教科学習へと円滑に修正・洗練・統合され、生涯にわたる質の高い学習プロセスの構築に寄与することが期待される。

### 【主な引用文献】

中央教育審議会（1971）「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について（答申）」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuou/toushin/710601.htm#9](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/710601.htm#9)（2024.11.15 閲覧）

中央教育審議会（2008）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/information/20230210-mxt\\_kouhou02-1.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/information/20230210-mxt_kouhou02-1.pdf)（2024.01.23 閲覧）。

中央教育審議会（2021）「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現（答申）  
[https://www.mext.go.jp/content/20210126\\_mxt\\_syoto02000012321\\_24.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126_mxt_syoto02000012321_24.pdf)（2024.06.03 閲覧）。

中央教育審議会（2024）「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～（審議まとめ）」  
[https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt\\_youji-000028085\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt_youji-000028085_2.pdf)（2024.01.23 閲覧）。

- 福元真由美 (2014) 「幼小接続カリキュラムの動向と課題—教育政策における2つのアプローチ—」『教育学研究』, 81 (4), pp396-407.
- 課題研究委員 (2014) 「課題研究委員会企画シンポジウム報告 遊びの質をどう捉えるか」『保育学研究』, 52 巻3号, pp415-428.
- 岸野麻衣 (2023) 「幼小移行期における子どもの学習はどのように転換していくのか: 小学1年生の授業における学習過程にあらわれるエージェンシー」『発達心理学研究』, 34 巻, 4号, pp298-311
- 厚生労働省 (2017) 「保育所保育指針」 フレーベル館.
- 国立教育政策研究所 (2015) 「スタートカリキュラムスタートブック: 学びの芽生えから自覚的な学びへと」 ([https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum\\_mini.pdf](https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum_mini.pdf)) (2024.12.10 閲覧)
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター (2005) 『幼児期から児童期への教育』 ひかりのくに.
- 今後の幼児教育の教育課程、指導、評価等の在り方に関する有識者検討会 (2024) 「最終報告」 ([https://www.mext.go.jp/content/20241017-mxt\\_youji-000038497\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20241017-mxt_youji-000038497_1.pdf)) (2025.08.24 閲覧)
- 新保真紀子 (2001) 『「小1プロブレム」に挑戦する』 明治図書, 14-22.
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説生活編』 日本文教出版.
- 文部科学省 (2011) 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について (報告)」 ([https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afiedfile/2011/11/22/1298955\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf)) (2024.12.13 閲覧).
- 文部科学省 (2017a) 『小学校学習指導要領』 東洋館出版社.
- 文部科学省 (2017b) 『幼稚園教育要領』 フレーベル館.
- 文部科学省 (2017d) 『小学校学習指導要領解説総則編』 東洋館出版社.
- 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館.
- 文部科学省 (2024) 『幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと? (幼児教育及び小学校教育関係者向けの参考資料)』 東洋館出版社.
- 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター編 (2018) 『発達や学びをつなぐスタートカリキュラム』 学事出版.
- 無藤隆 (2018) 『幼児期までに育てほしい10の姿』 東洋館出版社.
- 無藤隆 (2023) 「幼児教育と小学校教育の質の高さを求めるなかでその接続を可能にする」『子ども学/白梅学園大学子ども学研究所「子ども学」編集委員会 編』, 11, pp8-20.
- 無藤隆 (2024) 「幼児教育・保育を貫く遊び性・世界性・演技性」『発達』, 179, pp9-17.
- 奈須正裕 (2017) 『「資質・能力」と学びのメカニズム』 東洋館出版社.
- 内閣府文部科学省/厚生労働省 (2018) 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」 フレーベル館.
- 酒井朗・横井紘子 (2011) 『保幼小連携の原理と実践—移行期の子どもへの支援—』 ミネルヴァ書房.
- 齊藤多江子 (2017) 「幼小接続における教育課程の編成に関する研究」『こども教育宝仙大学紀要』, 8, pp37-45.
- 吉永安里 (2023) 「幼児教育と小学校教育における言葉の指導の接続—読むことの指導の差異と連続性から—」 風間書房.
- 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議 (2010) 「第8回議事要旨」 (<http://www.mext.go.jp/bmenu/shingi/chousa/shotou/070/gijigaiyou/1303695.htm>) (2024.11.15 閲覧).
- 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会 (2023) 「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～ (審議まとめ)」 ([https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt\\_youji-000028085\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt_youji-000028085_2.pdf)) (2025.02.01 閲覧)
- Anderson, J. R. (1989) The acquisition of cognitive skills, *Psychological Review*, 96 (3), 396-420.
- Chi, M. T. H., & Glaser, R. (1981) Categorization and representation of physics problems by Experts and novices, *Cognitive Psychology*, 13 (3), 345-378.
- Dreyfus, S. E. (2004) The Five-Stage Model of Adult Skill Acquisition, *Bulletin of Science, Technology and Society* 24 (3), 177-181.
- Dreyfus, S. E., & Dreyfus, H. L. (1980) A Five-Stage Model of the Mental Activities Involved in Directed Skill Acquisition, *California Univ Berkeley Operations Research Center*, Report No. ORC-80-2.
- Ellis, M.J./森林・大塚忠剛・田中亨胤訳 (2000) 『人間はなぜ遊ぶか: 遊びの総合理論』 黎明書房. (Ellis, M.J. (1973) *Why People Play*, Prentice-Hall.)

- ハンス=ゲオルグ・ガダマー/饒田収・麻生建・三島憲一・北川東子・我田広之・大石紀一郎訳 (1986) 『真理と方法 1: 哲学的解釈学の要綱』, 法政大学出版局.
- Henriot, J./佐藤信夫訳 (1974) 『遊び: 遊ぶ主体の現象学へ』白水社. (Henriot, J. (1973) *Le jeu*. Paris, Presses Universitaires de France)
- ヨハン・ホイジンガ/高橋英夫訳 (1973) 『ホモ・ルーデンス』中央公論社. (Huizinga, J. (1938) *Homo Ludens*, Versuch einer Bestimmung des Spielelementes der Kultur. Basel) .
- 今井むつみ (2016) 『遊びとは何か—探究人—になるために』岩波新書
- J.ピアジェ/E・H・エリクソン他著 (2000) 『遊びと発達の心理学 (心理学選書)』黎明書房.
- J.ピアジェ著/谷村寛、浜田寿美男訳 (1978) 『知能の誕生』ミネルヴァ書房.
- J.デュローイ/植田清次訳 (1951) 『思考の方法』春秋社.
- J.ピアジェ/大伴茂訳 (1962) 『遊びの心理学』黎明書房. (Piaget, J. (1945) *La formation du symbole chez l'enfant: imitation, jeu et rêve, image et représentation*. Neuchâtel, Delachaux & Niestlé.)
- J.ピアジェ/大伴茂訳 (1963) 『模倣の心理学』黎明書房.
- J.ピアジェ/滝沢武久訳 (1950/1972) 『発生的認識論』白水社.
- カイヨワ, R./多田道太郎・塚崎幹夫訳 (1990) 『遊びと人間』講談社学術文庫
- 西村清和 (1989) 『遊びの現象学』勁草書房.
- 中野茂 (1996) 「遊び研究の潮流: 遊びの行動主義から遊び心へ」『遊びの発達学: 基礎編』培風館.
- スザンナ・ミラー/森重敏・森樹訳 (1980) 『遊びの心理学: 子供の遊びと発達』家政教育社. (Millar, S. (1968) *The psychology of play*, Penguin Books)
- Rubin & Vandenberg (1983) *Play. In E.M. Hetherington, Handbook of Child Psychology: Socialization, personality, and social development*, Vol. 4, pp693-774.
- 坂部 恵 (1983) 『「ふれる」ことの哲学: 人称的世界とその根底』岩波書店.
- Smith & Vollstedt (1985) *On defining play: An empirical study of the relationship between play and various play criteria*, *Child development*, 56 (4), pp1042-1050.
- 清水武 (2004) 「遊びの構造と存在論的解釈」質的心理学研究, 第3号, pp114-129.
- 高橋たまき (1996) 「遊びの再考」『遊びの発達学: 基礎編』培風館.
- Vygotsky/土井捷三・神谷栄司訳 (2003) 『「発達の最近接領域」の理論』三学出版.
- Vygotsky・レオンチェフ・エリコニン他/神谷栄司訳 (1989) 『ごっこ遊びの世界』法政出版.
- 山田敏 (1979) 『遊びこよる保育 (幼児教育業書)』明治図書出版.
- 矢野勇樹 (2023) 「いいこと思いついた! の理論的背景」『佐伯胖編. 子どもの遊びを考える』北大路書房.
- 秋田喜代美 (2006) 「遊びこむ力」, 全国公立幼稚園長会幼稚園じほう, 5, pp4-8.
- 岩田純一 (2014) 『子どもの友だちづくりの世界 個の育ち・協同のめばえ・保育者のかかわり』金子書房, pp4-8.
- J.Chu&L.E.Schulz (2020) *Play, Curiosity, and Cognition, Annual Review of Developmental Psychology*, 2, pp317-343
- ジーン・レイヴ&エティエンヌ・ウェンガー/佐伯胖訳/福島真人解説 (1993) 『状況に埋め込まれた学習: 正統的周辺参加』産業図書.
- 川田学 (2018) 「エコロジカルシステムとしての「保育」の評価試論」『保育学研究』56 (1), pp21-32.
- 長野未来 (2022) 「二人称的アプローチによって捉える1歳児の「遊びこむ」プロセス」保育学研究, 60巻2号, pp137-147
- 長橋 (2013) 「子どものごっこ遊びにおける意味の生成と遊び空間の構成」発達心理学研究, 第24巻, 第1号, pp88-98.
- 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会 (2023) 『図書館情報学用語辞典 第5版』丸善出版.
- 大宮勇雄・河邊貴子・児嶋雅典・原孝成・若月芳浩 (2014) 「遊びの質をどう捉えるか (課題研究委員会報告)」『保育学研究』第52巻 (3), pp105-118.
- 齋藤久美子/無藤隆 (2009) 「幼稚園5歳児クラスにおける協同的な活動の分析—保育者の支援を中心に—」『湘北紀要』30, pp1-13.
- 安田裕子・サトウタツヤ (2012) 『TEM でわかる人生の径路—質的研究の展開』誠信書房.
- 安田裕子 (2009) 「TEA (複線径路等至性アプローチ)」『質的研究マッピング』新曜社, pp16-22
- 安藤浩太 (2024) 『幼児期の学びとの連続性を意識した国語授業の創造—入門期の物語実践における協同性に着目して—』全国大学国語教育学会国語科教育研究: 大会研究発表要旨集 147, pp391-394.
- Chi, M. T. H., Feltovich, P. J., & Glaser, R. (1981) *Categorization and Representation of Physics Problems by Experts and Novices*, *Cognitive Science*, 5, 2, pp121-152.

- 中央教育審議会 (2016) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の 学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)」  
([https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chuky\\_o0/toushin/icsFiles/afeldfile/2017/0\\_1/10/1380902\\_0.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chuky_o0/toushin/icsFiles/afeldfile/2017/0_1/10/1380902_0.pdf)) (2025.05.11閲覧)
- 日高友郎 (2019) 「オープンコーディング」『質的研究法マッピング』新曜社,p72-79.
- 教育出版株式会社 (2024) 『ひろがる言葉小学国語一上 教師用指導書 展開編』教育出版株式会社
- 工藤与志文/佐藤誠子/進藤聡彦 (2024) 「知識適用における既知性効果」の一般性およびその発生機序について」教育心理学研究 72 (2), pp87-98.
- クーツ/佐藤郁哉訳 (2018) 『質的テキスト分析法—基本原理・分析技法・ソフトウェア』新曜社
- Marzano, R. J. (2004) *Building Background Knowledge for Academic Achievement, Association for Supervision & Curriculum Development*
- 光村図書出版株式会社 (2024) 『小学校国語 学習指導書 1上 かざぐるま』光村図書出版株式会社
- 文部科学省 (2025) 「質の高い探究的な学びの実現」(<https://www.mext.go.jp/content/000360892.pdf>) (2025.05.11 閲覧)
- 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター編 (2018) 『発達や学びをつなぐスタートカリキュラム』学事出版
- 長岡由記 (2008) 「小学校入門期の文字教育についての検討：音声法を中心に」全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集 115, pp79-82.
- 奈須正裕 (2017) 『「資質・能力」と学びのメカニズム』東洋館出版社
- 白水始 (2012) 「認知科学と学習科学における知識の転移 (<特集>知識の転移)」人工知能 27 (4), pp347-358.
- 東京書籍株式会社 (2024) 『新編あたらしいこくご 1上 教師用指導書 研究編』東京書籍株式会社